

2. 視点を絞り主題に迫る けやの森学園幼稚園(埼玉県狭山市)

1. 研究の取り組みにあたって

けやの森学園では、教育理念を念頭に、現実の子どもたちの姿を考慮して、自然体験と日々の生活をプログラミングしています。その中で、人、自然、事物などとの関わりを通じて、子どもたちの「感じる心」を大切に、活動を楽しみ、ふくらませていながら個々の充実を図り、創造的な活動を展開しています。

教育理念「生き生きとそれぞれに生き生きと」

～生命を尊び生きる力を育む～

本園では自然の持つ素朴さ、美しさ、偉大さ、厳しさ、不思議さを五感を通して感じられるように導き、みずみずしい感性を培いたいという思いから、自然体験を重視しています。

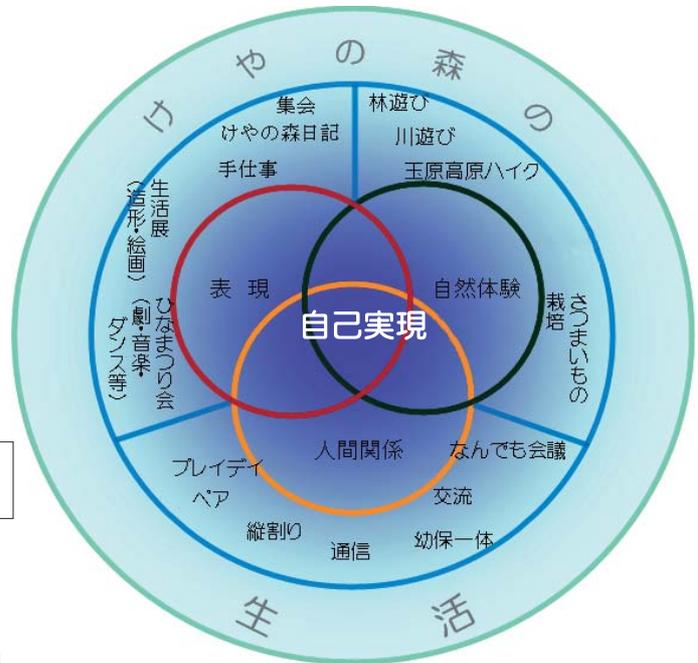
自然体験から生まれる豊かな感性が、一人ひとりの生きる力につながると信じています。

けやの森学園では子どもたちをこう捉えています

- 子どもは物事の本質をとっさに感じ取り、常に真実を知ろうとしています。
- どの子も信頼すれば必ずそれに応えようとします。
- どの子もよりよくなろうと日々努力しています。
- どの子も欲求が満たされれば、必ずうるおいと優しさが生まれます。
- 個人的な欲求を追求していくことは、個人一人ひとりにとどまらず、子どもたち全体へと波及していきます。

2. 生きる力を育む生活のしくみ

一年間の活動の具体的な“しくみ”として、けやの森学園での日々の生活のうえに「自然体験」「人間関係」「表現」と領域別に独自のプログラムをたてています。しかしながら、実際は一つのジャンルに限定できる活動ではなく、すべてが相互に関連しながら子どもの育ちにつながるものと考えています。この表の分類はその活動の時期やねらいに合わせて大まかに分けたものです。



3. 科学する心とは

科学する心とは
「なぜ? どうして?」と不思議を感じる心

自分のまわりで起きた出来事を、喜んだり、不思議に思ったり、また、自然の中で偶然見たこと、出会ったこと、触れたものに驚いたり、「どうして?」と疑問を持ち考えたり…、そのような心の状態を「科学する心」として捉えました。そしてそこから活動が始まると考えました。

4. 研究主題「科学する心から始まる豊かな生活づくり」

今年度は「科学する心とは何か」をしっかりと見極め、「科学する心」が、けやの森学園の子どもたちの生活にどのような形で影響し、学びにつながるのか検証していきたいと考えました。そこで、自然、人、さまざまな事物に触れて、不思議に感じたことを「科学する心」と捉え、そこから関わりが始まり生活が展開していくと考えました。その関わりが広がり、深まるにつれて生活が豊かに流れていくと考えました。その「豊かな生活づくり」について研究を進めていくために、下記のように視点を絞り追ってきたいと考えました。

着眼点1. [子どもの変化]

- ① [体験] いろいろな「なぜ? どうして?」の不思議を感じる。
- ② [表現] 感じたことを伝える。
- ③ [交換] お互いにどのように考え、工夫していくか。
- ④ [創造] 次への新しい取り組み。

着眼点2. [保育者の関わり]

一つ一つの過程において、保育者がどのように関わっていくのか。

日々のプログラムの中で [子どもの変化] に着目しながら、そこに [保育者の関わり] が重要な鍵となって保育の展開に関連してきます。子どもの豊かな生活づくりに保育者の援助や環境構成も欠かせない要因となることから、子どもと保育者の両面から研究を進めた。

毎週2日遊びに行き継続的に活動している「林遊び」での、虫との関わりやモグラとの関わりを通して、次々と広がる不思議や疑問に意欲的に向かい、予想したり想像したり、調べたり確認したりして活動も学びも広がる子どもの実態を捉えました。また、「堆肥作り」や「他園との交流(林遊び)」を通して、友達との共同作業の喜びや意見交換の大切さを押さえました。このように、観点を明確にして分析・考察した様々な事例を、研究の着眼点に沿ってまとめることで、下記のように「科学する心」を明確に捉えることができました。

5. 着眼点1[子どもの変化]に沿って事例をまとめ、捉えられたこと

1 「科学する心」は不思議を感じる心 —活動のきっかけを作る—

子どもたちが体験の中から気付き、不思議に思う気持ち、また自ら気づくこと、疑問を持つことを「科学する心」と捉えてスタートしました。

「なぜ? どうして? 変だね。どうなっているのかな? どうしたらこうなるの? 不思議だね? これなあに?」と、物との出会いが、興味、関心につながり、事物や人との関わりが始まりました。そこから真実を追究していく活動が展開され発展していったことから「科学する心」が活動のきっかけということが実証できました。

2 「科学する心」は表現し交換する心 —共に学び、共に育つ環境を作る—

その不思議から興味、関心を持ち、「知りたい」という意欲をかき立てられ、事実を調べたり、本物と比べたり、分類したり、「もっと〇〇してみたい」の欲求が、次から次へ活動を誘起していきました。事実を知り、それを個から仲間へ開き、意見交換しながら、さらに考え、認識を深めていくことができました。そこには、子ども同士、子どもと保育者、子どもと家庭の関係がそれぞれに作用しあい、子どもを中心に共に学び、それぞれに育ち合うことができました。

3 「科学する心」は未来を創造する心 —いきいきと生きる原動力となる—

【体験】 子どもたちは自然の中で体験する不思議(なぜ? どうして?)を感じます。

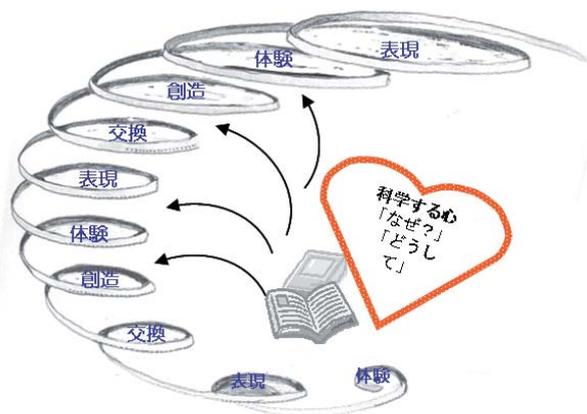
【表現】 それを友だちや保育者に伝えます。そして共感しあいます。相手の感動を認め、自分の感動に共感してもらうと、子どもは心からすがすがしい思いに満たされます。充実と満足を得るのです。

【交換】 お互いに意見を交換し合い、さらに興味や欲求が高まります。そういう心の状態は、さらに新たな体験や不思議を求めて冒険心をかきたてていきます。

【創造】 そして、目標に向かって挑戦して、挫折して、反省して、工夫して、常に先にある「いい世界」へと自分を上げていくのです。その過程が学びであり、完遂した結果が喜びとなって子どもの心を豊かにするのです。この巡りが幸せを実現する自己実現の構造であり、いきいきと生きる循環になります。

豊かな生活はこのような循環で成り立っていくことがわかりました。

(図表参照)



ポイント

「科学する心」は「なぜ? どうして?」と不思議を感じる心の状態であるとし、そこから様々なものとの関わりが広がり、深まることで、子どもたちの豊かな生活が育まれていくと捉えています。日々の実践の中では「子どもの変化に着目すること」と、「保育者の関わり」が重要な鍵であるとし、2つの着眼点に絞って研究が進められました。自園なりの視点を絞り込んだことで、子どもたちの「確かな育ち」や保育者の「適切な関わり」を確認することに結びついています。「科学する心」は「活動のきっかけ」になると捉え、それが「体験」「表現」「交換」「創造」というプロセスを経て、子どもたちのいきいきと生きる原動力が生み出されていく、という園の考えが分かりやすく整理され、示されています。